

## 「豊かな心の育成」に関する研究 ～道徳教育のマネジメントを通して～

町畑 光明\*, 遠藤 孝夫・鈴木 久米男・多田 英史\*\*

(2020年2月14日受付)

(2020年2月14日受理)

Mitsuaki MACHIHATA, Takao ENDO, Kumeo SUZUKI, Hideshi TADA

A Study on Nurturing a Rich Mind :

Through the Management of Moral Education

### 要 約

本研究の目的は、「豊かな心の育成」に深く関わる道徳教育について、A県内の小学校における現状と課題を把握し、その課題解決に向けた道徳教育のマネジメントの在り方について提言することである。

本研究により、調査結果から明らかになった「道徳科の授業づくりや評価の難しさ」や「まなびフェスト(学校ビジョン)と道徳教育を関連させる難しさ」について、道徳教育のマネジメントとして評価の研修会、OJTによる授業改善の研修、まなびフェストと道徳教育を関連させる取組を連携協力校で実践し、一定の成果が認められた。しかし、A県の大規模校1校のみの実践であるため、他の学校規模における本研究での道徳教育のマネジメントの有効性は明らかになっていない。また、残された課題としては、業務改善の視点を含めた研修を行う時間の確保、まなびフェストの評価の在り方があげられる。

### I はじめに

#### 1 研究の目的

本研究の目的は、「豊かな心の育成」に深く関わる道徳教育について、A県内の小学校における現状と課題を把握し、その課題解決に向けた道徳教育のマネジメントの在り方について提言することである。

そのために、A県内の小学校における道徳教育の現状や「豊かな心の育成」の一つの指標となる「徳」に関するまなびフェスト(以下、「まなびフェスト」とする)と道徳教育の関連について実態を把握する。

調査結果の考察により、道徳教育の推進やまなびフェストの達成に向けた取組における課題を明らかにし、その解決に向けた道徳教育のマネジメントの在り方について実践を通して有効性を検証していく。

なお、本研究での道徳教育のマネジメントは、「道徳教育の実践力を高めるマネジメント」と「まなびフェスト達成に向けた道徳教育の実践化を図るマネジメント」の2つとする。

#### 2 主題設定の理由

『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』(文部科学省2017A)では、「道徳教育を通じ

\* 岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻、\*\* 岩手大学大学院教育学研究科

て育成される道徳性、とりわけ、内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度、豊かな情操などは、『豊かな心』だけでなく、『確かな学力』や『健やかな体』の基盤ともなり、『生きる力』を育むために極めて重要なものである」としている。また、『いわて県民計画（2019～2028）第1期アクションプラン』（岩手県2019A）、『岩手県教育振興計画』（岩手県教育委員会2019A）や『2019年度学校教育指導指針』（岩手県教育委員会2019B）でも、これまで同様に「豊かな心の育成」に道徳教育の充実が求められている。しかし、学校では、道徳教育の推進において2つの課題があると考えられる。

一つ目は、道徳教育の要である道徳科の授業改善である。小学校では平成30年度より道徳科が実施され「考え、議論する道徳」への質的転換や評価への対応等が始まっている。先行実施を見通し授業改善や評価の在り方について準備をしてきているのだが、実施から間もないこともあり、現在も試行錯誤の段階であると考えられる。

二つ目は、道徳教育とまなびフェストとの関連である。岩手県の公立小・中・義務教育学校では、まなびフェストを活用した学校評価を行っており、それは、学校の中核となる取組である。しかし、道徳教育もまなびフェストも、どちらも「豊かな心の育成」に資するものであるが、これらがそれぞれに取り組みされている現状があるのではないかと考える。

Society5.0の時代に向かう中、今後、さらに複雑化する社会をよりよく生きていくうえで、児童の道徳性を養うことは極めて重要なことである。そのため、学校においては、児童の「豊かな心の育成」に向けた計画的・組織的な道徳教育のマネジメントが必要であると考え、本主題を設定した。

### 3 先行研究

本研究の目的に迫るための前提として、道徳教育のマネジメント、道徳科の評価、道徳教育の推進の3つの視点から先行研究をみていく。

道徳教育のマネジメントについて、宮地（2010）

は、道徳教育推進教師の役割を推進・調整・支援の3つの観点で具体化し教職員や校内組織に関わることで、教員や各校内組織の動きが具体化したり主体的な取組が促されたりしたと述べている。また、濱田（2018）は、中学校において学年団でT1を交代しながら学年団の全ての教職員で指導に当たるようにしたことで、スパイラルに授業改善が図られるとともに、生徒の成長の評価へとつなげていくことができると感じた述べている。

以上のように、道徳教育推進教師等を中心とした具体的な推進計画の提示やチームによる授業づくりの取組が有効であること明らかになった。しかし、小学校においてT1を交代しながら行う道徳科の授業実践はあまり報告されていない。

道徳科の評価について、赤瀬（2018）は、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」「児童が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」「発言や記述ではない形で表出する児童の様子」の視点から作成した評価フォーマットにより、それぞれの視点で見取った内容を評価として文章にまとめることができた述べている。また、中山（2017）は、生徒に自己評価の大まかなルーブリックを示した上で、5段階の尺度による自己評価を記録しデータとして管理・分析し、それを記述式の評価に生かす評価の在り方を提案している。

以上のように、小学校、中学校における道徳科の具体的な評価の在り方が示されている。しかし、評価に対する教員の認識の実態は不明のままである。

道徳教育の推進について、矢作・押谷（2017）は、スクール・マネジメントの中核に道徳教育を据えた総合道徳プロジェクトを構想し、それに基づき実践した研究では、児童の道徳性の変容や学校機能の活性化を図ることができたことから一定の成果がみられたと述べている。また、岩手大学教育学部附属中学校（2019）の『2019年度学校公開教育研究中間発表会 特別の教科 道徳』では、総合的な学習の時間や行事に向かって「ユニット」を組むことで学びを深めることをねらいとしてい

ると述べている。

以上のように、学校経営や各教科等横断的な指導という観点から道徳教育を考えることが重要であるとことが示された。しかし、道徳教育とまなびフェストを関連させた取組の研究は、あまり報告されていない。

以上の先行研究の成果と課題を踏まえ、本研究の目的に迫るために、研究の視点として、道徳科の授業づくり、道徳科の研修、道徳教育とまなびフェストの関連の3点を設定し、道徳教育のマネジメントの在り方について検討していくこととした。

#### 4 本論の構成

本論の構成は、次の通りとする。Ⅱ章では、A県内の小学校における道徳教育の現状と課題、道徳教育とまなびフェストとの関連等について調査を実施し、課題を明らかにする。Ⅲ章では、Ⅱ章で明らかになった課題を抽出し、先行研究の成果を踏まえ、「豊かな心の育成」に向けた道徳教育のマネジメントを連携協力校で実践し成果を検証する。Ⅳ章では、Ⅲ章の実践の成果と課題を示す。最終章のⅤ章では、研究のまとめをするとともに、今後の研究課題を示す。

## Ⅱ A県内の小学校における「豊かな心の育成」に関する調査

### 1 調査の目的と内容

本調査の目的は、「豊かな心の育成」に関わる道徳教育の現状と課題、道徳教育とまなびフェストとの関連を把握し、道徳教育のマネジメントの在り方を検討することである。

A県内の小学校における道徳教育の推進やまなびフェストとの関連について、6件法による意識調査、取組内容や課題等についての選択肢及び自由記述による調査を実施した。

## 2 調査対象

A県内全域の公立小学校から各教育事務所を網羅するように考慮し無作為に抽出した89校の管理職、道徳教育推進教師、担任等（主幹教諭、指導教諭、教諭、講師）を対象に質問紙による調査を平成31年3月に実施した。

質問紙の回答数・回答率は、管理職が66人で74.1%、道徳教育推進教師が59人で66.2%、担任等が519名で50.9%であった。

## 3 道徳科の授業改善と研修についての意識調査

### (1) 担任等を対象とした道徳科の授業改善及び研修の意識の違い

道徳科の授業改善と研修について担任等を対象に、「6：強くそう思う」「5：かなりそう思う」などの6件法による意識調査を行った。

図1は、それぞれの調査項目ごとに学校規模により平均の値を求め、グラフ化したものである。全体の平均の大きい調査項目から並べている。なお、学校規模は、19学級以上、12～18学級、6～11学級、5学級以下の4つに分けている。

これらの結果から、学校規模による担任等の意識の違いを平均の値及び、その差をグラフから

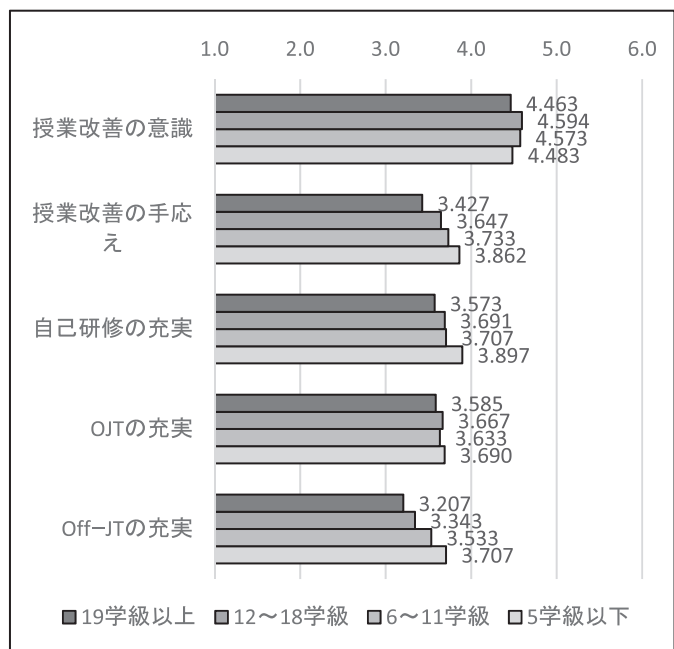


図1 担任等を対象とした道徳科の授業改善及び研修の意識の違い

読み取ることができる。「道徳科の授業改善の意識」については、学校規模に関わらず、4.5前後になっている。これは、道徳の教科化に伴い授業改善の必要性を感じていることが理由として考えられる。しかし、「授業改善の手応え」は、学校規模を問わず「やや、そう思う」の4.0に届かず、授業改善が十分に進んでいないと考えられる。また、授業改善を支える研修についても、自己研修、OJT、Off-JT 全てにおいて、学校規模を問わず4.0に届いておらず、研修に対しても充実感を十分に持てないでいることが考えられる。

これらの結果から、学校規模による担任等の道徳科の授業改善及び研修の意識の違いを平均の値やその差をグラフから読み取ることができる。しかし、統計分析による検定を実施していないため、考察の結果は、単なる印象評価となり科学的な根拠は十分とはいえない。

## (2) 学校規模による道徳科の授業改善及び研修の意識の違い

学校規模の違いによる差を把握するために、それぞれの学校規模の平均の値の違いを分散分析により検討した。さらに有意差がみられた調査項目については、学校規模の違いを把握するために、

Holm法による多重比較を実施した。なお、本論のデータ分析は、清水(2016)によるHADを用いた。

表1は、分散分析及び多重比較の結果である。表には分散分析の結果として、F値とp値を示した。F値の大きいものから並べてある。さらに5%及び1%の危険率で有意差がみられた項目については、多重比較の結果を示してある。また、多重比較については、5%の危険率の場合は「>」、1%の場合は「>>」で示してある。

分散分析の結果から、「授業改善の手応え」と「Off-JTの充実」は5%の危険率で有意な差があった。さらに、多重比較を実施したところ、結果として、「授業改善の手応え」では、5学級以下と6～11学級が、19学級以上より5%の危険率で有意に高くなった。「Off-JTの充実」では、5学級以下が、19学級以上より5%の危険率で有意に高くなった。これは、学校規模が小さいほど、児童の実態に応じた授業が構想しやすいことや児童の道徳性に係る成長の様子を見取りやすいこと、日常の授業準備や学級事務等に割く時間が少なくなることが要因として考えられる。また、学校規模は、校外研修への参加の容易さにも少なからず影響があることが考えられる。

表1 学校規模による道徳科の授業改善及び研修の意識 比較 (分散分析)

	F値	p値	多重比較 (Holm法)
授業改善の手応え	3.465	.016 *	3>1,4>1
Off-JTの充実	3.382	.018 *	4>1

多重比較の表記 1:19学級以上 2:12～18学級 3:6～11学級 4:5学級以下

\*\*: $p < .01$  \*: $p < .05$  >>: $p < .01$  >: $p < .05$

## 4 まなびフェストに関する調査

### (1) まなびフェストの項目の内容

管理職を対象に、まなびフェストの項目を選択肢により調査した結果が、表2である。項目ごとに選択された実数と割合を示している。最も多かった「あいさつ」は、回答数が49で31%であった。「思いやり・なかよし・協力」は、回答数が27で17%、「自己肯定感・有用感」は、回答数が26で16%と続いていた。

表2 まなびフェストの項目の回答数と割合

まなびフェストの項目	回答数	割合(%)
あいさつ	49	31
思いやり・なかよし・協力	27	17
自己肯定感・有用感	26	16
学校への満足度	24	15
感謝	15	10
勤労・奉仕	10	6
いじめ・不登校	3	2
その他	5	3

(2) まなびフェストを達成するために重視している教育活動

まなびフェストを達成するために重視している教育活動について、管理職、道徳教育推進教師、担任等を対象に実態調査を行った。重視するものを3つ選択してもらい、それぞれの割合を示したものが図2のグラフである。三者の割合の平均の大きいものから並べてある。

「生活指導」が、全体の約4割を占め、その中でも、道徳教育推進教師と担任等が管理職より10ポイント以上と特に高くなっている。次いで「道徳科」「生徒指導の取組」「学校行事等」と続く。しかし、「道徳教育の取組」の割合は三者とも低

くなっており、まなびフェストの達成に道徳教育を活用している意識は高くないと考えられる。

日常生活指導がまなびフェストの達成のために特に重視されていることは、表2のまなびフェストの項目で、「あいさつ」「思いやり・なかよし・協力」「感謝」「勤労・奉仕」を合わせると全体の64%を占めていることからもうかがえる。「自己肯定感・有用感」や「学校への満足度」は、児童の実際の姿として見取することは難しいが、上記の4項目については、担任が生活指導を通して見取り適宜、指導や評価を行い、児童の実践力を高めることをめざしていることが考えられる。

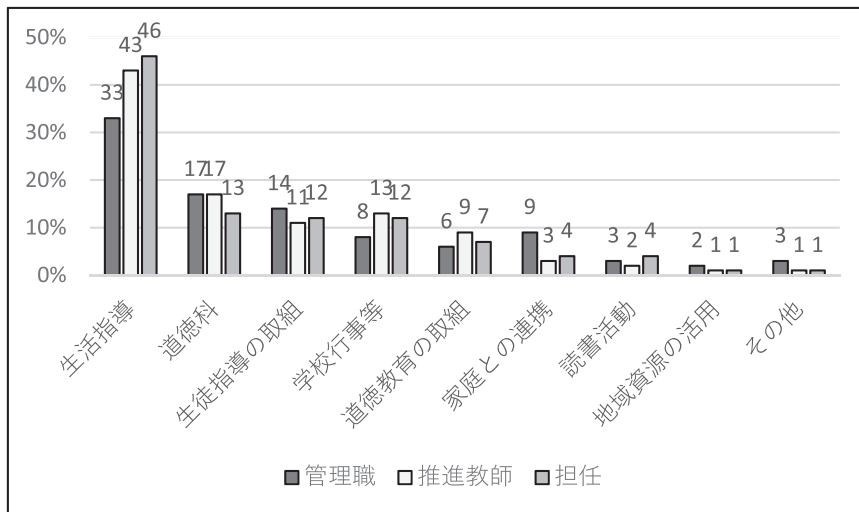


図2 まなびフェストを達成するために重視している教育活動

(3) まなびフェストの数値目標の設定

管理職にまなびフェストの数値目標の設定について調査を行ったところ、結果は表3のようになった。「全てに設定している」と回答した学校は、54校中23校で43%、「設定しているものといないものがある」と回答した学校は、26校で48%、「設定していない」と回答した学校は、5校で9%となった。

数値目標を設定しない理由として、道徳性に係る成長の様子を見取することは困難であることや道徳科の評価と同様に数値による評価はなじまないことが考えられる。しかし、

文部科学省(2016)の『学校評価ガイドライン〔平成28年改訂〕』では、「教育活動その他の学校運営について、目標(Plan)－実行(Do)－評価(Check)－改善(Action)というPDCAサイクルに基づき継続的に改善していくためには、具体的な目標や計画を設定することが必要となること」と示している。学校評価の観点から、「具体的な目標」と

表3 まなびフェストの数値目標の設定

	回答数	割合(%)
全てに設定している	23	43
設定しているものといないものがある	26	48
設定していない	5	9

して、まなびフェストでも数値目標を設定している学校が多いと考えられる。そして、その目標は、教師が見取り指導、評価ができるものや児童が自己評価できるものが多いと考える。

### 5 まなびフェストや道徳教育についての調査

#### (1) まなびフェストや道徳教育の推進上の課題

まなびフェストの取組や道徳教育の推進上の課題について、管理職、道徳教育推進教師、担任等を対象に自由記述による調査を行った。分析には、樋口(2014)のKHコーダーによる計量テキスト分析を行い、中心性(媒介)検出による共起ネットワークの図3を描いた。

実線の部分には、「道徳、授業、在り方、意識」や「指導、評価、難しい」が多く抽出され、「道徳科の授業の在り方や授業への意識」や「道徳科の指導や評価の難しさ」が読み取れた。

点線の部分には、「道徳教育、まなびフェスト、関連」が多く抽出され、「道徳教育とまなびフェストの関連」に課題があることが読み取れた。

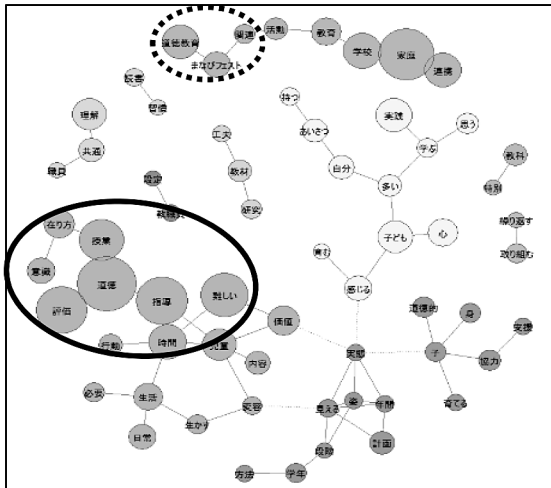


図3 まなびフェストや道徳教育の推進上の課題の共起ネットワーク

#### (2) まなびフェストや道徳教育の見取りの課題

まなびフェストや道徳教育の見取りの課題について、(1)と同様に調査、分析したところ、共起ネットワークは、図4のようになった。

実線の部分には、「児童、変容、見取り、見取る、評価、難しい」が抽出され、「児童の変容を見取っ

たり、評価したりすることの難しさ」が読み取れた。

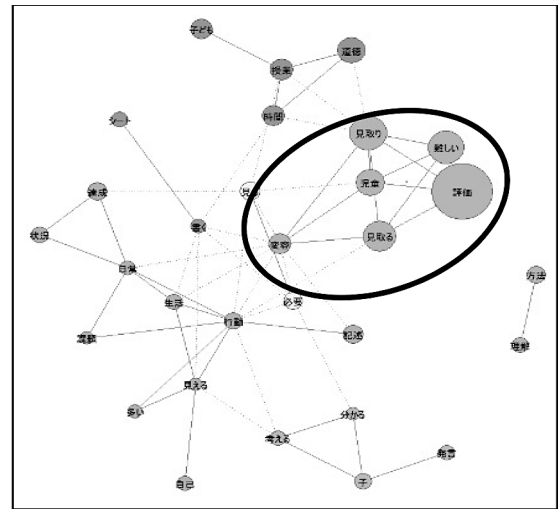


図4 まなびフェストや道徳教育の見取りの課題の共起ネットワーク

### 5 調査結果の考察

調査結果から、道徳科については、研修の機会が少なく、授業づくりや評価に難しさを感じている教員が多いこと、まなびフェストと道徳教育については、これらに関連させた取組や道徳科同様に見取りや評価について課題意識があることがわかった。

### Ⅲ 道徳教育のマネジメントによる実践と成果の検証

調査結果から、教員は道徳科の指導や評価に難しさを感じていることが明らかになった。また、まなびフェストと道徳教育を関連させた取組や児童の見取りに課題意識があることがわかった。

これらの課題解決に向けて、「道徳教育の実践力を高めるマネジメント」として道徳科の評価の研修会とOJTによる授業改善の研修、「まなびフェスト達成に向けた道徳教育の実践化を図るマネジメント」として、学校行事にまなびフェストの視点を反映させた取組を行うこととした。

## 1 道徳教育の実践力を高めるマネジメントの実践

「道徳教育の実践力を高めるマネジメント」として道徳科の評価の研修会とOJTによる授業改善の研修を連携協力校で実施し、その成果を検証した。

### (1) 道徳科の評価の研修会

この研修会のねらいは、A県内の小学校で明らかになった「道徳科の評価に対する難しさ」につ

いて、研修会を通して具体的なイメージを持ち、難しさの意識の改善を図ることである。

#### ① 研修会前後の道徳科の評価及び所見に対する意識

研修会終了後、担任を対象に「道徳科の評価の難しさ」「道徳科の所見の難しさ」について6件法による意識調査を実施し、研修会前との意識の違いについてt検定を実施したところ、結果は表4のようになった。

表4 研修会前後の道徳科の評価と所見についての意識 比較

	研修会前	研修会后	差	効果量 <i>d</i>	<i>t</i> 値	df	<i>p</i> 値	
道徳科の所見の難しさ	4.550	3.611	-0.939	.929	2.907	34.604	.006	**
道徳科の評価の難しさ	4.650	3.889	-0.761	.871	2.702	31.948	.011	*

\*\*: $p < .01$  \*: $p < .05$

「道徳科の所見の難しさ」が1%、「道徳科の評価の難しさ」が5%の危険率で有意に低くなり、この研修会が評価や所見への難しさの軽減に効果があったと考えられる。

今回の研修では、特に道徳科の所見に対する難しさの意識が改善されている。これは、赤瀬(2018)の「小学校道徳科における評価の在り方に関する研究」を取り上げたことが大きく関わっていると考える。この研究の中で紹介されている「評価

フォーマット」には、道徳科の評価の視点や見取りのポイント、具体的な児童の発言や記述の内容、それ以外の形で表出する児童の様子と、それに対応する評価記述例(所見例)が示されている。これを用いて所見文を作成する演習を通して、教師の見取りから所見文を作成するイメージを持つことができたと考える。自由記述の内容からもそのことがうかがえる。

#### 【研修後の自由記述】

##### ○研修会の有効性

- ・評価の学習がとても有意義でした。
- ・評価、所見で悩んでいたが、大分イメージが持てました。
- ・評価の仕方、所見の書き方などが参考になりました。

##### ○評価フォーマットのよさ

- ・特に、所見の書き方についてフォーマットのあることで安心感が持てました。
- ・評価フォーマットを使うと評価が容易にできそうだった。
- ・フォーマット、使えると実感しました。評価の見通しが持てて大変ありがたいです。

### (2) OJTによる授業改善の研修

この研修では、A県内の小学校で明らかになった「道徳科の授業改善の意識は高いが、その手応えを実感できていない」という現状から、OJTによる授業改善の研修の一つとしてローテーション

道徳に取り組むこととした。ローテーション道徳とは、一人の担任が、学級を換えて同一教材で複数回行う授業のことである。

#### ① ローテーション道徳に対する児童の意識

図5は、各授業終了後に児童を対象に行った

ローテーション道徳に対する意識調査の結果のグラフである。調査は、「5：とてもそう思う」「4：そう思う」などの5件法で行った。授業者は2組の担任であった。1組と3組では、全て4.6を超えていた。

ローテーション道徳に対する児童の意識について分散分析を行い、学級による多重比較したところ、結果は表5のようになった。

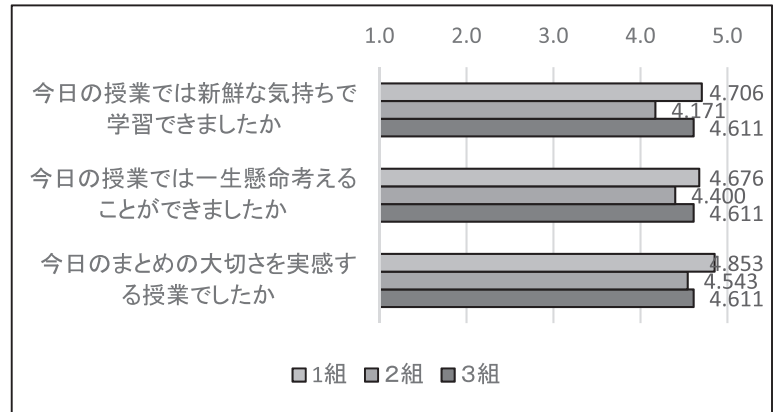


図5 ローテーション道徳に対する児童の意識

表5 学級によるローテーション道徳に対する意識 比較（分散分析）

	F値	p値	多重比較(Holm法)
今日の授業では新鮮な気持ちで学習できましたか 1：1組      2：2組      3：3組	3.583	.042 *	1 > 2

\*\* : p < 0.1    \* : p < 0.5    >> : p < .01    > : p < .05

「今日の授業は新鮮な気持ちで学習できましたか」では、1組が2組より5%の危険率で有意に高くなり、その他に有意な差はなかった。このことから、普段にはない担任以外の教師による授業は児童に新鮮な感覚を与え、本時のねらいとする価値を実感できたと考えることができる。このことから担任以外の教師による授業は、4年生の児童にとっては学習意欲を高め主体的な学習を促す効果があると考えられる。

② ローテーション道徳に対する実施学年担任の意識

3回目の事後研究会後、実施学年担任を対象に道徳科やローテーション道徳の研修について6件法による意識調査とインタビュー調査を行った。

表6は、学年担任による道徳科とローテーション道徳に対する実施前後の意識である。「考え、議論する道徳のイメージが持てない」では、平均の値が-2.00と難しさの意識が改善されたと考える。また、「ローテーション道徳は、有効である」で

は、平均の値が+1.67で、「6：強くそう思う」「5：かなりそう思う」と効果を感じていることがわかった。

インタビュー調査では、授業者は、課題意識を高める導入の在り方、考えを可視化するための教具の工夫、自己を見つめたり多面的・多角的に考えたりするための問い返しや切り返しの発問について学ぶことができた、と授業改善が進んだことを実感していることがわかった。参観者も児童の発言をつなげることや発問の質の向上、構造的な板書等、授業者の指導技術の向上を感じていた。また、ローテーション道徳が授業力向上につなが

表6 学年担任による道徳科とローテーション道徳に対する実施前後の意識

質 問	学級担任 ※ 2組担任は授業者	実施前	実施後	差	変化の平均
考え、議論する道徳のイメージが持てない	2組担任	5	3	-2	-
	1組担任	5	2	-3	
	3組担任	5	4	-1	
ローテーション道徳は、有効である	2組担任	4	6	+2	+
	1組担任	4	6	+2	
	3組担任	4	5	+1	



る研修であることを授業者、参観者ともに感じていることがわかった。ただ、課題として、自習を解消するための配慮がないと負担感は大きく、実施の難しさは残った。

## 2 まなびフェスト達成に向けた道徳教育の実践化を図るマネジメントの実施

### (1) 学校行事とまなびフェストを関連させる意図

「がんばりシート」は、学校行事の取組にまなびフェストの視点を反映させ、児童のまなびフェストの意識を高めることや児童の活動の様子を担当が見取る手立てとすることをねらいとしたものである。学校行事では、他者と協働する取組を通して自他のよさや成長を実感できるように指導に当たるため、児童はまなびフェストを強く意識す

ることができる。また、学校行事のねらいには、まなびフェストと関わる内容が含まれていることが多く、学校行事の取組が道徳教育とまなびフェストを関連づける教育活動の一つになると考える。

### (2) 学校行事の実践を通じたがんばりシートの効果の検証

連携協力校に対して、グリーンキャンプ（第5学年）と音楽学習発表会（全校）の取組に「がんばりシート」の活用を要請した。

#### ① グリーンキャンプの実施とがんばりシートの結果の検証

7月に第5学年が行ったグリーンキャンプにおいて実施前後の児童のまなびフェストに対する意識調査の結果についてt検定を実施したところ、結果は表7のようになった。

表7 グリーンキャンプ前後におけるまなびフェストの意識 比較

	キャンプ前	キャンプ後	差	効果量 <i>d</i>	<i>t</i> 値	df	<i>p</i> 値	
あいさつ	4.180	4.733	0.553	.888	6.308	183.727	.000	**
よいところの発見	3.870	4.535	0.665	.824	5.858	187.343	.000	**
進んで取り組む	4.290	4.772	0.482	.698	4.955	168.577	.000	**
学校が楽しい	4.180	4.495	0.315	.348	2.472	184.257	.014	*

\*\**p* < .01    \**p* < .05

「学校が楽しい」が5%、それ以外が1%の危険率で有意に高くなった。グリーンキャンプに向けた事前学習の充実とグリーンキャンプへの期待感が、あいさつや主体的な取組を促し、そのことが自他のよさの発見につながり、児童も達成感や満足感を得ることができたと考える。

#### ② 音楽学習発表会の実施とがんばりシートの結果の検証

11月に全校による音楽学習発表会が行われた。今回は全校での活用を要請した。この際、発達段階を考慮して1～3年生用と4～6年生用のがんばりシートを作成した。

このシートを用いて、音楽学習発表会前後のまなびフェストに対する意識の違いについてt検定を実施した。表8はその結果である。「進んで取り組む」では、3年生、4年生が1%の危険率で、

2年生は5%の危険率で有意に高くなった。「よいところの発見」では2年生が、「あいさつ・返事」については3年生が、それぞれ5%の危険率で有意に高くなった。しかし、反対に意識が低くなった項目もみられた。「学校が楽しい」では、6年生が1%の危険率で、5年生は5%の危険率で有意な差がみられた。

次に、音楽学習発表会後のまなびフェストの意識について分散分析を行い、学年による多重比較したところ、結果は表9のようになった。顕著なこととして「あいさつ・返事」「進んで取り組む」といった「自分がすること」への自己評価に、1、2、3年生と4、5、6年生に有意な差がみられた。また、4、5、6年生でも学年が上がるにつれ自己評価が低くなっていた。

表8 音楽学習発表会前後におけるまなびフェストの意識 比較

	音楽会前	音楽会后	差	効果量 <i>d</i>	<i>t</i> 値	df	<i>p</i> 値	
進んで取り組む 3年	4.340	4.881	0.542	.787	5.770	150.311	.000	**
4年	3.730	4.160	0.430	.423	3.002	197.714	.003	**
2年	4.656	4.851	0.195	.357	2.442	138.594	.016	*
よいところの発見 2年	4.075	4.447	0.372	.375	2.575	179.284	.011	*
あいさつ・返事 3年	4.689	4.851	0.163	.312	2.275	176.162	.024	*
学校が楽しい 6年	4.340	3.890	-0.450	.431	3.059	193.315	.003	**
5年	4.617	4.330	-0.287	.312	2.112	146.994	.036	*

\*\*:*p* < .01    \*:*p* < .05

表9 音楽学習発表会后における学年間のまなびフェストの意識 比較 (分散分析)

	<i>F</i> 値	<i>p</i> 値	多重比較 (Holm法)		
あいさつ・返事	37.776	.000 **	1>>4, 1>>5, 1>>6, 2>>4, 2>>5, 2>>6, 3>>4, 3>>5, 3>>6, 4>>6, 5>>6		
よさの発見	6.632	.000 **	5>>1, 5>>3, 4>1, 5>2		
進んで取り組む	44.595	.000 **	1>>4, 1>>5, 1>>6, 2>>4, 2>>5, 2>>6, 3>>4, 3>>5, 3>>6, 4>>6, 5>6		
学校が楽しい	7.812	.000 **	1>>6, 2>>6, 3>>6, 4>>6, 5>6		
1:1年	2:2年	3:3年	4:4年	5:5年	6:6年
**: <i>p</i> < .01    *: <i>p</i> < .05			>>: <i>p</i> < .01    >: <i>p</i> < .05		

これらのことから、1、2、3年生では、自分のがんばりを素直に表現でき、4、5、6年生では、自己を省察する力が高まり批判的にとらえる傾向がうかがえる。このことは、児童の発達段階によるもので、教師の見取りと児童の評価に差を感じる要因の一つと考える。また、この傾向を踏まえて見取ることで、児童を認め励ます評価につながると考える。

#### IV 実践研究の成果と課題

##### 1 成果

道徳科の評価の研修会では、評価と深く関わる所見について合せて扱うことで、よりニーズに応じた研修を行うことができ、評価や所見に対する意識が改善された。先行研究の知見を積極的に活

用することも満足度の高い研修につながると考える。

OJTによる授業改善の研修として行ったローテーション道徳の実践では、参観者から助言を受けることで、回を重ねるごとに授業者の教材研究が深まり、授業がブラッシュアップされ本時のねらいに迫ることができた。また、授業者、参観者ともに「考え、議論する道徳」のイメージが持てたと肯定的にとらえており、この研修は有効であったと考える。児童への効果については、担任以外の教師では、児童の実態に応じた授業ができないのではないかという懸念があった。しかし、児童が担任以外の教師との授業を新鮮な気持ちで受けたことや授業のねらいを実感できたととらえていることから、4年生では、担任以外でも児童が主体的に学び、ねらいに迫る授業を実践できると考える。

がんばりシートの活用では、児童がまなびフェストを意識することや教師が児童の取組の様子を見取ることの有効であると一定の評価を得られた。まなびフェストを意識した取組を計画的に実施することで、児童も教員も感覚的な自己評価から具体的で信頼性のある評価に近づくと考える。また、がんばりシートの活用から、行事の内容や学年の発達段階によって児童の自己評価に差が生じることがわかった。この傾向を把握した上で指導や評価を行うことは、児童のよさやがんばりを認め励ますことにつながり、「豊かな心の育成」に寄与できると考える。

## 2 課題

研修を行うことにより道徳の評価に対する難しさの意識が改善されたが、日々の授業や学級事務、校務分掌等の業務や会議等で多忙な中に、いかに時間を確保し研修を組み入れていくかに課題がある。また、小学校でのローテーション道徳には、自習体制や補教等に課題が残る。これについては、担任外や専科の教員による授業を当てたり管理職や担任外が参観者となり助言を行ったりするといった対応が考えられる。がんばりシートの活用では、このシートの見取りが、まなびフェストの評価に直結するものではなく、多くの教師が感じるまなびフェストの評価の難しさの解消には至っていない。

以上のことから、課題は残るものの、「道徳教育の実践力を高めるマネジメント」と「まなびフェスト達成に向けた道徳教育の実践化を図るマネジメント」を行うことで、調査結果から明らかになった、道徳科の授業づくりや評価に対する難しさの改善、まなびフェストと道徳教育を関連づけることや児童の見取りに成果があることを確認できた。

## V おわりに

おわりに、本研究を通して明らかになったこと

をまとめるとともに、残された研究課題について示す。

「道徳教育の実践力を高めるマネジメント」として行った道徳科の評価の研修会やOJTによる授業改善の研修、「まなびフェスト達成に向けた道徳教育の実践化を図るマネジメント」として行ったまなびフェストと学校行事を関連させる取組は、A県内の小学校で明らかになった課題の解決に一定の成果があることが明らかになった。

残された課題としては、業務改善の視点も含めた時間の確保の検討、まなびフェストの見取りや評価の在り方があげられる。そして、これらを改善していくために、教員に道徳教育の重要性を浸透させるマネジメントの在り方があげられる。

## 【引用・参考文献】

- 赤瀬光雄「小学校道徳科における評価の在り方に関する研究～学習状況や道徳性に係る成長の様子を評価の視点を基にして見取る評価方法を通して～」(『平成29年度岩手県立総合教育センター教育研究第173号』2018)
- 岩手県「いわて県民計画(2019～2028)第1期アクションプラン(2019A)」
- 岩手県教育委員会「岩手県教育振興計画(2019A)」
- 岩手県教育委員会「2019年度学校教育指導指針(幼稚園等・小学校・中学校・義務教育学校)(2019B)」
- 岩手大学教育学部附属中学校「2019年度学校公開教育研究中間発表会 研究総論」及び「道徳科教科論」
- 中山芳明「道徳における生徒の自己評価を生かした記述式評価と授業力の充実(2年次)～生徒の真情に迫る道徳の記述式による評価と授業力向上への手だて～『京都市総合教育センター平成28年度研究紀要』No.582 2017)
- 濱田安沙「中学校におけるカリキュラム・マネジメントを用いた道徳教育に関する研究～指導計画の実質化及び学校・家庭・地域による連携を通して～」(高知県教育委員会大学院派遣教員

研究報告書 2018)

宮地真人「協働意識を高めることによる道徳教育  
推進体制の改善・充実～道徳教育推進教師がか  
かわる道徳教育マネジメントの推進～」(『群馬  
県総合教育センター平成22年度長期研修員の研  
究報告書242集』2010)

文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教  
科 道徳編』(2017A)

矢作信行・押谷由夫「道徳教育を中核としたスクー  
ル・マネジメントの研究」(『昭和女子大学近代  
文化研究所 学苑・初等教育学科紀要』No.920  
17～31 2017)